凡例

一、本書は、Jules Michelet『Histoire de France』のなかの「中世編」を全訳し、六巻に分けたうちの第五巻である。翻訳には一九八一年にRobert Laffont社から出版された一巻本、Michelet『Le Moyen Age』を用いたが、Flammarionの全集本（一九七四年刊）も参照した。

一、本巻では、英仏百年戦争の後半、フランスがイングランド軍に侵略され追いつめられるなかでのジャンヌ・ダルクの登場と、その劇的な死を扱った第十部、シャルル七世による対英戦勝利、フランスの再生を扱った第十一部、そしてブルゴーニュ公とシャルル七世の対立を扱った第十二部までが収められている。

一、第四巻でもお断りしたが「イギリス」という呼称を本書でもかなり頻繁に使っている。「イングランド」とすべきではないかというご意見もあろうかと思うが、明らかに「イングランド王国」「イングランド王」を指す場合を除いては日本人にとって馴染んでいる「イギリス」の呼称を用いた。

一、地名や人名の表記については現地で用いられている発音を優先した。とくに本書では本巻に限らずフランドル（現在のベルギー）の地名が頻出する。それらは、フラマン語式の呼び方をカッコして併記し、フランス語式の呼び方を用いたが、「アントワープ」のように英語式呼び方ではあるがすでに日本人に馴染んでいるものは、そのまま用いた。

一、登場人物のなかには、ミシュレの原著では「王太子」「ブルゴーニュ公」等、役職名しか記されていないのを、個人名を書き加えたものもある。

目次

第十部　ジャンヌ・ダルクの生と死　3

第一章　「キリストのまねび」　4

第二章　オルレアンの包囲戦　20

第三章　オルレアンの乙女（一四二九年）　43

第四章　ジャンヌの裁判と死（一四二九～一四三一年）　88

第十一部　百年戦争からの脱出　179

第一章　ヘンリー六世とシャルル七世　180

第二章　フランスの変革と平定（一四三九～一四四八年）　216

第三章　イギリス軍のフランスからの撤退　255

第十二部　ブルゴーニュ公国の盛衰　301

第一章　フランドルでの戦争（一四三六～一四五三年）　302

第二章　ブルゴーニュ公国の栄華　343

第三章　シャルル七世とフィリップ善良公（一四五二～一四五六年）　353

第四章　シャルル七世とフィリップ善良公（続）　364

訳者あとがき　383

人名索引　394

第十部　ジャンヌ・ダルクの生と死

第一章「キリストのまねび」

「《最も死せる死者 les plus mortes morts》が最も復活に近い最良の人々である」――ある賢人はこう言った。

喜びと恐れの交錯から逃れて、もはや期待せず、傲慢と欲望を捨てることは、一つの偉大な勇気である。このような死は、むしろ生である。

魂の活力に溢れたこの死は、その魂を静穏で大胆不敵なものにする。もはやこの世ならざる魂が何に怯えようか？　この世のあらゆる脅威も、精神に対し何ができるだろうか？

『福音書 l'Evangile』以来、最もすばらしいキリスト教の書である『キリストのまねび』（De Imitatione Christi）〔訳注・邦訳の題は『キリストにならいて』が一般的であるが、このあとの訳文の都合上、このようにした〕は、まさしく、キリスト自身と同じく、死の胎内から出てきたもので、その生の胚芽を運んできたのは古代世界の死、中世の死である。

この『キリストのまねび』の知られているかぎり最初の写本が現れたのは、十四世紀末か十五世紀初めのようである。一四二一年には、その写本は数え切れないほどになり、一つの修道院のなかだけで二十冊は見られた。さらに、印刷術が始まって最初に印刷されたのも『キリストにまねびて』であった。いま遺っている写本の数でも、ラテン語版が二千、フランス語版が千を超える。翻訳もフランス語のそれは六十種、イタリア語のそれは三十種にのぼる。

この書はキリスト教世界全体に広まり、各国民によってその国民の書物のように刊行され読まれてきた。フランス人たちは、そこに《ガリシスム gallicismes》〔訳注・フランス語特有の語法・表現〕を反映し、イタリア人たちは《イタリアニスム italianismes》〔訳注・イタリア語法〕を、ドイツ人たちは《ゲルマニスム germanismes》〔訳注・ドイツ語特有の語法〕を反映した。

聖職者たちもそれぞれの階層で《まねび》を競い合った。司祭たちは、ジャン・ジェルソンこそこの書の著者だと主張し、律修参事会員たちはトマ・ド・ケンペン（トマス・ア・ケンピス）だと言い張り、修道士たちはベネディクト会のジェルセンという修道士だと言った。そこには、あらゆる聖人、神学博士の影が見られるので、そのほかの人々も、それぞれに主張することができた。この闇に包まれた問題をよく見抜いていたのがサン＝フランソワ・ド・サール（1567-1621）で、彼は「この本を著したのは聖霊（Saint-Esprit）である」と言っている。

こうした著者や国の問題に劣らず、著された時期の問題も激しい論争の的になった。十三世紀と十四世紀、十五世紀が、この栄誉を競い合った。この本が広く民衆に知られるようになったのは、

人名索引

※欧文表記は原著に従った。

【ア行】

アダム Adam　9
アドルフ（ゲルドル伯）Adolfe de Gueldre　206, 229
アニェス・ソレル Agnès Sorel　102, 221, 329, 330, 355
アハシュエロス（ダレイオス王の息子）Assuérus　195
アラン・シャルティエ Alain Chartier　355
アランソン公ジャン五世 Alençon, duc d', Jean　61, 80, 96, 221, 225, 227, 228, 356, 360-362, 378
アリエノール・ダクィテーヌ Eléonore d'Aquitaine　292, 299
アリソン・ド・メイ Arizon de May　25
アルフォンソ（アラゴン王）Alphonse　256
アルフォンソ寛大（ナポリ王）Alfonse le Magnanime　350-351
アルブレ（伯）Albret, comte d'　30, 234
アルベルトゥス・マグヌス Albert le Grand　350
アルマニャック伯リシュモン Richemont（アザンクールで英軍の捕虜となる）　97, 234, 237-238, 356
アン（女王）Anne　299
アングレーム伯 Angoulême, comte d'　232
アンジュー公 Anjou , duc d'
——ルイ二世（1384-1417）　24
——ルイ三世（1417-1434）　61
アントニオス（聖）Antoine　305
アントワーヌ・ド・ラ・サル Antoine de la Sale　374
イアソン（金羊毛の英雄）Jason　104, 348
イザベル（シャルル六世の娘）Isabelle　258
イザベル・ダラゴン（フィリップ四世の母）Isabelle d'Aragon　41
イザベル・ド・ブルボン（ブルボン公ジャン二世の姉、突進公の妻）Isabelle de Bourbon　303, 353
イザベル・ド・ポルテュガル（ブルゴーニュの善良公の妻）Isabelle de Portugal　303, 316, 326, 344, 365
イザベル・ド・ロレーヌ（ルネ王の妃）Isabelle de Lorraine　25, 53, 223, 239, 256-257
イザベル・ロメー（ジャンヌ・ダルク

ジュール・ミシュレ（Jules Michelet）

フランス革命末期の1798年８月にパリで生まれ、父親の印刷業を手伝いながら、まだ中世の面影を色濃く残すパリで育ち勉学に励んだ。1827年、高等師範の歴史学教授。1831年、国立古文書館の部長、1838年からコレージュ・ド・フランス教授。復古的王制やナポレオン三世の帝政下、抑圧を受けながら人民を主役とする立場を貫いた。1874年２月没。

桐村泰次（きりむら・やすじ）

1938年、京都府福知山市生まれ。1960年、東京大学文学部卒（社会学科）。欧米知識人らとの対話をまとめた『明日の文明を求めて』のほか、『仏法と人間の生き方』等の著書、訳書にジャック・ル・ゴフ『中世西欧文明』、ピエール・グリマル『ローマ文明』、フランソワ・シャムー『ギリシア文明』『ヘレニズム文明』、ジャン・ドリュモー『ルネサンス文明』、ヴァディム＆ダニエル・エリセーエフ『日本文明』、ジャック・ル・ゴフ他『フランス文化史』、アンドレ・モロワ『ドイツ史』、ロベール・ドロール『中世ヨーロッパ生活誌』、フェルナン・ブローデル『フランスのアイデンティティⅠ・Ⅱ』、ミシェル・ソ他『中世フランスの文化』、ジュール・ミシュレ『フランス史［中世］Ⅰ～Ⅳ（以上、論創社）がある。

フランス史［中世］Ⅴ
HISTOIRE DE FRANCE: LE MOYEN AGE

2017年９月１日　初版第１刷印刷
2017年９月10日　初版第１刷発行

著　者　ジュール・ミシュレ
訳　者　桐村泰次
発行者　森下紀夫
発行所　論 創 社
東京都千代田区神田神保町 2-23　北井ビル
tel. 03（3264）5254　fax. 03（3264）5232
振替口座 00160-1-155266
http://www.ronso.co.jp/
装　幀　野村　浩
印刷・製本　中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1637-1

©2017 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。